

目指す学校像	「豊かな心をもち、互いに認め合う児童の育成」かしこく(進んで学ぶ子)やさしく(素直で明るい子)たくましく(体をきたえる子)一生懸命に(よく働く子)
--------	---

重点目標	1 ICTの活用、一部教科担任制の実施、個別指導の充実による、学ぶ意欲・基礎学力の向上。 2 安全・安心な学校にするための教育支援、相談体制、学校行事の充実。 3 自己の生き方を見つめ、よりよく生きようとする豊かな心をはぐくむ教育の推進。(体験活動の充実) 4 個のよさを見取り、互いに認め合う児童を育成するための教職員研修の充実。
------	---

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。  
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

学校自己評価								学校運営協議会による評価		
年度								実施日 令和5年2月14日		
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等		
1	(現状) ○全国学力・学習状況調査や市の学習状況調査では、国語・算数ともに全国、市平均と低い結果である。 ○市の学習状況調査において、学習に対する関心・意欲・態度に関する質問に肯定的な回答をした児童の割合は、市平均と比べ全教科で総じて高い。 (課題) ○全国学力・学習状況調査の結果分析から、特に国語の「書くこと」及び算数の「数と計算」等、主に基礎的な学力の定着に課題が見られる。また、正答率の高・低の結果には二極化傾向が見られる。 ○国語や算数への学習意欲は高いが、問題の意味を理解する読解力や論理的に考える思考力が課題である。	・学びの自律化に向けた個に応じた指導とICT機器の活用と授業改善 ・地域の学習素材を活かした STEAMS TIMES を含む総合的なカリキュラムを開発し、学ぶ楽しさを実感できる教育活動を展開する。	①国語、算数について、スタディサプリ、ドリルパークなどの学習への取組状況を基に児童の学習進度を把握し、学習相談を行い、児童が目標をもって学習できるようにする。 ②エバンジェリストを核とした ICT 機器の活用や授業展開の工夫により、児童の多様な意見や考えを交流する学習活動を展開し、学ぶ意欲を高める。	①1～6年の国語・算数2学期末まとめテストにおいて、平均正答率が70%以上となったか。 ②学校自己評価に係る児童アンケート「児童のタブレットの学習活用に関する項目」の肯定的な回答の割合が90%以上となったか。	①1～6年の国語の平均正答率(平均の得点)は80.8点、算数の平均正答率(平均の得点)は78.5点となり、目標を達成することができた。 ②学校自己評価における児童アンケート「わたしは、授業でよくタブレットをつかって、学習にやくだてています。」では、肯定的な意見が83.6%となり、目標には届かなかった。	B	・基礎的な学力定着を図るための朝や授業時間に繰り返し学習する時間を今後も継続して実施していく。 ・タブレットの授業における効果的な活用方法について、引き続き他校の実践などを参考に高める研修を行っていく。また、学校外でのタブレットの活用について検討を続けていく。	・基礎学力の向上が本地域で重要な課題となっている。タブレットを活用し、基礎学力の定着を図ってほしい。 ・「学力の向上」について、中学校区でもチャレンジスクールに多くの参加があるなど、学びたい児童・生徒が潜在的に多い。学校・地域として、児童・生徒の「学びたい」に応え、自ら学ぶ環境を作ることが必要とされている。 ・地域内には自然・歴史史跡など、児童の指導に活用できる人的資源・物的資源がある。これらの活用を図っていくことも考えたい。		
2	(現状) ○全国学力・学習状況調査において、「学校に行くのが楽しい」の質問に肯定的な回答をした児童の割合は、全国、市平均を上回った。 ○昨年度、救急車を要請したけがは0件であったが、雨天時の校内で走るなどを原因とした打撲等のけがが多く発生した。 (課題) ○家庭の状況を起因とするストレスが児童の心身に与える影響が大きいことから、今後も児童一人ひとりの状況を、家庭の状況の変化を含め、的確に把握し、組織的に支援・相談していくとともに、適切に外部機関と連携する体制、仕組みづくりが課題である。 ○教職員による施設設備の安全点検を確実に行うだけでなく、児童が自ら危険を予測したり、回避したりする力をはぐくむことが課題である。	・児童一人ひとりへの細やかな教育支援・相談に向けた校内体制の充実 ・安全な生活の実現に主体的に取り組み児童の育成に向けた学校行事の充実	①児童に実施している「心と生活のアンケート」や「お話タイム」等の面談の記録を蓄積し、児童一人ひとりの状況を継続的に把握し、適切な教育相談を行う。 ②要配慮児童について校内委員会や生徒指導部とICTを活用しながら、情報交換を密にし、SC、さわやか相談員、SSW、他機関等と連携し、迅速に対応する。	①学期に1回実施している「心と生活のアンケート」について、3～6年の「信頼自己」の数値(A・Bの割合)を向上させたか。 ②学校自己評価に係る教職員アンケート「児童一人ひとりへ教育支援・相談に向けた校内体制に関する項目」の肯定的な回答の割合が90%以上となったか。	①児童を対象とした「心と生活のアンケート(信頼自己)」について、3～6年の数値は1～3回目の数値に、有用な変動(0.4→0.4)は見られなかった。児童を対象とした適切な教育相談につなげるための「お話タイム」を月1回実施することができた。 ②学校自己評価における教職員アンケート「生徒指導・教育相談」に係る4つの項目について、92.3～100%となり、目標を達成することができた。	A	・「お話タイム」の継続的な実施と拡充により、児童の心の状況や悩みについて、早期に捉え対応する体制を固めていく。 ・月1回、各児童の状況について校内で情報交換を行い、学校の全職員で児童の状況に合わせた適切な教育相談を行う。		・今年度から始まった、児童の理解や児童の抱える悩み等に対し、適切に対応するための「お話タイム」がよい効果をもたらし、学校評価における児童の教育相談に関する項目の評価を高めている。児童に寄り添うよい取組として、次年度以降も継続してほしい。 ・近隣地域では、児童が関係した交通事故が多く発生している。公道でも安全確認の指導を継続して指導していく必要がある。	
3	(現状) ○昨年度の準備委員会を経て、今年度、学校運営協議会を立ち上げ、目指す児童の姿について熟議を積み重ね、自ら課題を見出し、協働して解決していく児童を地域全体で育てていくことを共有した。 (課題) ○昨年度までの学校評価から、学校に対する家庭の意識に温度差がある。 ○今年度は、学校運営協議会で共有した目指す児童の姿を、家庭、地域に広め、地域全体で児童の育成にあたる体制づくりが課題である。	・地域と連携した体験活動を通じた目指す児童の姿の具現化と教育活動の公開 ・自己を見つめ、よりよく生きようとする児童を支援する学校運営協議会の熟議と行動	①地域の豊かな自然を生かした体験的な学習活動として、全学年において稲作や野菜の栽培を実施することで、土や自然に触れる感動を味わわせる。 ②相手と目を合わせて心のこもった挨拶ができるよう、講話や登校指導、児童会のあいさつ運動を実施する。	①学校自己評価に係る教職員アンケート「保護者、地域、コミュニティスクールの連携に関する項目」の肯定的な回答の割合が90%以上となったか。 ②学校自己評価に係る保護者アンケート「児童のあいさつに関する項目」の肯定的な回答の割合が90%以上となったか。	①学校自己評価における教職員アンケート「家庭・地域との連携」に係る4つの項目について、61.5～92.3%となり、おおむね目標を達成することができた。 ②学校自己評価における保護者アンケート「場に応じたあいさつができる子に育っている。」では、肯定的な意見が87.1%となり、目標には届かなかった。	B	・学校、PTAが協議の下で協力して児童の指導に当たっていく。 ・保護者を対象としたアンケートでは目標に届かなかったが、児童・教職員を対象としたアンケートの数値は向上している。今後も発達段階に応じた「あいさつ」の実践について、取組を続けていく。			・コロナ禍により、児童・生徒のみならず地域においてもコミュニケーション不足が課題となってきた。地域にしながら地域と繋がりを作れない状況を改善していきたい。 ・あいさつ運動などの各種取組によって、自分からあいさつをする児童の数が増えている実感がある。ただし、朝のあいさつ運動の期間が終了すると、児童のあいさつも小さくなる傾向がある。児童の意識に継続的に働きかける取組が必要である。
4	(現状) ○ICT機器の活用方法について、エバンジェリストが中心となり研修を重ねてきた。 ○全学年一部教科担任制実施により、各教員の専門性を生かした教科指導を行うことができてきた。 (課題) ○ICT機器の活用について、個々の教員間が活用が進んでいるものの、取組を共有することで、更に活用が進むと考えられる。 ○基礎的な学力定着や読解力、論理的思考力の向上に向けた知見やイメージの共有が求められる。	・個々のよさを見取り互いに認め合う児童を育成する教師集団を形成する研修の実施	①年間を通して、ICT機器の活用方法について、教員間で共有する研修を実施する。 ②一人ひとりの教員が年間を通して取り組む授業改善の目標を設定し、目標達成に向けた授業を年に2回以上公開し、管理職による指導を実施する。	①学校自己評価に係る教職員アンケート「教職員の学習におけるICT活用に関する項目」の肯定的な回答の割合が90%以上となったか。 ②学校自己評価に係る教職員アンケート「体験的な学習・問題解決的な学習指導に関する項目」の肯定的な回答の割合が90%以上となったか。	①学校自己評価における教職員アンケート「さいたま市GIGAスクール構想」の趣旨に呼応し、児童一人一台端末の整備により、ICTを活用した効果的な学習を展開している。」では、肯定的な意見が84.6%となり、目標には届かなかった。 ②学校自己評価における教職員アンケート「体験的な学習・問題解決的な学習指導、児童の興味・関心を生かした学習指導が適切におこなわれている。(以下略)」では、肯定的な意見が92.3%となり、目標を達成することができた。	B	・ICT機器の学習への活用方法について、試行錯誤をしながら効果的な実践の研究を継続的に進めていく。 ・児童の興味・関心を高めることに効果的な、体験的な学習や問題解決的な学習について、本校の児童の実態や校地の環境を活かした実践の研究を継続的に進めていく。			

